「はい、承知しました。ええ、今後とも宜しくお願いします。」

デザイン一課の室内から美しい声が響き渡る。彼女の名前は山本百合　23 歳。
美しい顔立ちで社内でも評判の高い美人女子社員である。
デザイン一課の人員は殆ど女性で構成されている。デザインを中心とした業務の為、
女性の持つ美的感覚を生かそうとして結成された部署である。
その中でも百合の存在は一際目立っており、同僚や近い世代では人気物の存在であった。
しかし、そんな彼女からはとても想像出来ないような信じられない一面、もう一つの顔があるのだ。
それは昼のＯＬの仕事とは別に夜のアルバイト、ＳＭの女王として圧倒的な地位を獲得し奴隷を調教する姿であった。
百合がそんな性癖に目覚めたのは短大時代の出来事、友人から頼まれたあるアルバイトが切っ掛けであった。それがＳＭ女王のアルバイトと知った時は戸惑ったが、人生経験と思い興味本位にチャレンジした事が始まりであった。
初めて手にしたＳＭ用の奇妙な道具、客として現れた紳士な男達に向かってムチを
振り上げて叩く。
それを快感として受入れる男性、百合にしてみれば今までは普通の環境で過ごして来た、
普通の女性であった為、その出来事は凄まじい衝撃であったが、それと同時に自分の
心の深奥に経験した事のないような快感に溺れていた。
1 日のアルバイトが終了し、その後は普通の学生に戻り何気ない日々を送っていたが
あの時感じた快楽と、なんとも言えない不思議な気持ちが忘れられずにＳＭアルバイトを紹介してきた友人に相談するのだった。
その友人にしてみれば百合がＳＭに興味を持った事は、願ってもない話であった。
ＳＭという世間ではタブーな世界で、身近な親しい仲間が出来る事は頼もしい為、
何としても百合を引きずり込みたかった。
友人の名前は知美といい、年齢は百合と同じ 23 歳である。
知美のＳＭの経験は短大に入ってからであった。普段から派手な生活をしていた彼女は
普通のアルバイトだけでは追いつかず生活が苦しかった。
困りはてた知美が辿り付いた場所がＳＭ嬢のアルバイトであった。最初は抵抗があったものの、慣れるに連れその独特の快感と高額な収入に取り付かれ、いつのまにか無くては
ならない存在になっていた。
知美はＳＭに興味をもつ百合の相談に快く乗り、あらゆる専門知識や手法を教え込んだ。
自分の体験談を聞かせＳＭビデオを見せ、その魅力や良さ、それに付随して来る収入、
そんな話をするに連れ百合の瞳が輝きだしていた。
それからの百合の生活は知美と共にＳＭ嬢に没頭する日々であった。
知美から受けたＳＭ教育、そして実戦でのあらゆる経験、その面白さはもはや生活の

一部となり、無くてはならないものになっていた。
最初はモラルから自分の行っている行動に抵抗を感じていたが、ＳＭの快感と志を共にする知美の存在から、常識の感情が序所に薄れていった。それと同時に百合はＳＭ嬢を演じるＳ性のサディスト役のせいで、人格も攻撃的でプライドの高い性格に変貌していくのだった。

「百合、お疲れ。資料作成有難う。」

「いいわよ。今度また飲みに行きましょうね。」

夜の仕事で充分な収入のある百合がＯＬを続ける理由は、健全な自分を装いたいという気持ちと、昼と夜に別々の顔を持ち君臨する生活にミステリアスな魅力を感じていたせいでもあった。

（ふふ、、、まさか私に別の顔があるなんて夢にも思わないでしょうね。）

自分が同僚や後輩から歓迎される度に百合は、なんともいえない快楽を感じるのであった。
直向に仕事を真面目にこなす昼の自分、夜はＳＭ嬢の衣装を着て異性を調教する。
そんな事を考えて日々のＯＬの仕事をすると、全身が痺れるような酔った感覚に犯されるのであった。

「百合さん、ちょっといい。」

直属の上司、佐々木幸子が厳しい口調で呼び、百合を振り向かせた。

「なんでしょうか、主任。」

「あなたに話があるの。会議室に来てちょうだい。」

百合は「またか」と思い最奥部の会議室に向かうのであった。
佐々木幸子　30 歳。最近、百合の部署に異動して来たばかりである。
幸子の仕事の実績は誰もが認めるが、彼女の性格は若い女子社員からは敬遠されていた。
傲慢な性格と横暴な態度、仕事では度が過ぎる程の細かすぎる指摘など、特に若く美し女性を目の敵にしていた。
二人は会議室に入り一旦椅子に掛けると、幸子がすぐに冷静な口調で喋り始めた。

「百合さん、率直に言うわ。最近あなたの変な噂を聞いたの。
あなた他の部署の異性と疑われるような交際が多いそうね。ここは会社だから
弁えてもらわないとね。
全く、こんな事でいちいち煩わせないでよ。ただでさえ忙しいのに。」

いつものもパターンで幸子の長い説教が始まった。だが今回はいつも通り黙って聞き流す
事が出来る内容ではなく、百合は幸子の嫌味交じりの説教を業が煮える思いで聞いていた。
幸子が指摘した百合の異性との多数の交際については事実であった。
長い間ＳＭという特殊な世界で様々な経験をし、その中でマゾの快感を快楽にして生きる
男達を嫌という程見てきた百合。
常に自分優位で異性との関係を持続する。そんな価値感を持つ百合の交際は、普通とは掛
け離れたものであることは自然の成り行きであった。
その結果ＳＭの客だけではなく、同僚の異性にまで百合のＳ性を兼ね揃えた魅力で
虜にしていったのだ。中には社内の男性をＳＭで責めた時もあり、奴隷と化している
物もいた。
そんな関係が何故か幸子に耳に入ってしまったのである。
幸子は清楚で美しい外見とは裏腹に、他人の私情に必要以上関わる一面があった。
冷静に仕事をこなすキャリアウーマンだがその反面、人の秘密など聞きつけるのは
人一倍早かった。時には重要な情報も聞きつけてライバルや同期の弱みを握り、陥れた
事もあった。
今回も独自のルートで百合の情報を聞きつけたのであろが、幸子にとってみれば
仕事のストレスを発散する良い機会であった。
百合の美貌や社内でのムードメーカー的な存在、幸子にしてみれば特に面白くもない
事である。その為、前々から何かある度に、百合に当たるよう態度をとっていた。

「っていう事よ。分かった。バカじゃないから私の言う事が理解できたわよね。」

幸子の長い説教がようやく終わり、会議室を出た百合であった。
幸子はすっきりした顔立ちで百合より先に進み、自分のディスクに向かうのであった。
その姿を後ろから眺めていると、さらに怒りが倍増され、興奮して動機が早くなる。

（なに、なんかすごく腹が立つわ。、、なによ、なんであの女に私のプライベートな
事までゴチャゴチャ言われないといけないの。）

自分の席に戻り業務を行う百合であったが、ついさっき受けた屈辱感がおさまらず
なにも手につかない状態であった。

そんな様子を遠くの席から細かくチェックしている幸子、まるでそれを待っていたかのように、すかさず百合の元に来て再度注意を行う。

「百合さん、もたもたしなでね。さっさとしてちょうだい。」

ついさっき嫌な事を言われ、ただでさえ気が立っているというのに、さらにまた追い討ちを掛けるような言葉、そんな事を言われ不機嫌にならない人間などいないであろう。
しかし立場上、百合と幸子は上司と部下。それは変えようのない事実である。
百合は怒りのあまり張り裂けそうな胸を押さえ、自分の仕事を渋々行うのであった。

幸子に注意され、気落ちした状態の最悪の１日、業務が一通り終了したのは夜 20：00 であった。あの後さらに幸子の指示で残業した為、いつもより帰宅時間が伸びてしまった。
消沈の気分を少しでも晴らしたい為、友人の知美に連絡を取り、二人で行付のショットバーで待ち合わせの約束をする。

「お待たせ、百合。」

知美が遅れてショットバーに入って来て百合の隣りに座る。

「どうしたのよ、いきなり。なにかあった。」

「聞いてよ。今日さあ、会社でムカツク女から屈辱を受けたわ。
ほら、前に話したことあるでしょう。あの女主任よ。」

「なによ、仕事の愚痴。」

「いいじゃないの。聞いてよ。こんなに腹が立ったのは始めよ。まったく、、あの女。」

「はい、はい、聞いてあげるわよ。どうぞ、気の済むまでお話なさい。」

百合は今日起きた出来事を事細かく話し、幸子への不満を知美にぶつける。
一旦口を開くと止まることなく続く百合の愚痴。
知美はそれに対して最初は聞き流していたが、しだいに気持ちが共鳴し、幸子に対して百合同等の憎悪が込み上げてきた。

「なんか聞いていたらムカツクわね。あなたよく耐えたわね。私だったら

その場で張り倒していたかもしれなわ。」

「私も一瞬そう思ったわよ。まったく、ＳＭの世界じゃトップの私がＯＬだと惨めね。」

「ねえ、なんでＯＬなんてやっているの。ＳＭだけで充分じゃないの。よく両立出来るわね。私には到底真似出来ないわ。」

知美は百合とは違いＳＭ一本で生活をしていた。収入は充分であった為、無理をしてまで他で働くことなどバカらしくて出来なかった。
百合もＳＭの仕事で充分な収入がある為、昼の仕事をしなくても生活には困らなかった。
しかし、百合が昼にＯＬの仕事をする目的はお金ではなく、健全な自分を装うためであった。
短大卒業後、いきなりＳＭ業を本職にしてしまうなど、当時の百合の常識ではとても出来なかった。しかし、自分の快楽を充分に果たすＳＭを捨てる事は出来ず、考え抜いた結果昼はＯＬ、夜はＳＭ嬢の選択をしてしまった。
だが社会に出て３年、最初に抱いていた時の常識も変わりつつあった。
知美のように自分の好きな事をして収入を得て、自分の有意義な時間を作り贅沢な暮らしをする。いつの頃からか百合もそんな生活に憧れるようになっていた。

ＯＬの仕事も悪くはなく、それなりの充実感もあった。共に働く同僚や健全な仕事をしている自分に満足は出来る。しかし仕事の昼と夜の両立は苦痛になる時もあり、無理をしてまで働く理由もないと考えていた。
その欲求はこの最近次第に強くなり、又、最近、幸子が異動して来たことが一層に退職を考える切っ掛けとなっていた。

「まったくＯＬなんて馬鹿らしいわ。大した給料もなく嫌な上司に言わ放題。
最初はそれなりに満足していた部分もあったけど、今はあの女、幸子のせいで最悪よ。」

「だったら辞めちゃえば。生活には困らないでしょう。」

「それは前々から考えていたわよ。近い内にさっさと辞めようってね。でもね、今日受けたあの屈辱を背負ったまま退職なんて、なんか悔しいわ。」

「でも仕方ないじゃん。それが普通の世界よ。特に企業だとね。フフフ、ＳＭ界だとトップの座なのに、普通のＯＬが抱えるような悩みを愚痴るなんて、あなたの奴隷が知ったら失望されるわよ。」

知美は百合の裏の顔を知る友人であると同時に仕事仲間である為、二人で組んで
奴隷を調教した事もある。
百合のＳＭ嬢のサディストとしての迫真の演技を目にする時は、思わず見とれて
しまうくらい迫力がある。
そんな百合が時に見せる今回のような弱い一面、それはＳ嬢の時とはギャップが
ありすぎる為、少々おかしく思えた。

「うるさいわね、ＳＭの世界しか知らない知美には分からないわよ。」

「フフフ、そりゃそうだ。これがＳＭ界だと簡単なのにね。生意気なヤツはとことん
責められるのにね。ＳＭ女王様、百合の怒り。男だったら間違いなくハードプレイね。
ムチで徹底的に叩き上げて、ロウソクでは悲鳴を上げる程の灼熱攻撃。そして最後は
お決まり浣腸。フフフ、浣腸を使って顔が赤面する位に言葉で辱しめて、泣き叫んでも
許さない。あなたの今の怒りだと、こんなプレイになりそうね。」

この時、百合の体に電撃のようなものが走り、心の中にある野心が目覚めた。
知美の冗談半分、面白半分で出た言葉。その内容を聞き、今までにない何か、今までに
ない妄想、それは初めてＳＭを経験した時に感じた快楽と酷似していた。

（幸子を、、あの女をＳＭで責めて復讐したら・・・。ムチで叩く。どんな声を出すのかし
ら。いつも冷静を装っているあの女が。ロウソクを垂らしたら、、どこに垂らそうかしら、
背中、お尻、うう、、ハアハア、、私、興奮しているの。さ、幸子に、、浣腸・・・
浣腸プレイなんてあの女には掛け離れた物でしょうね。
どんな声を出して悲鳴を上げてウンチするのかしら。ププ、、あんな顔してウンチを垂れ流
すなんて・・
浣腸されるって分かった瞬間、どんな顔をするのかしら。フフフ、、面白いわ。面白すぎる。）

「ちょっと、百合、百合ったら」

激しい興奮を伴った妄想から、ハっとして我に帰る百合であった。

「どうしたのよ。ボーっとして。なんかすごく興奮しているような表情よ。」

鋭い知美の突っ込みにびっくりした百合であったが、すぐに平静を取り戻していた。

「別に、ちょっとね。プ、、アハハハ、、」

「なに笑っているのよ。」

百合はさっき妄想した内容を思い浮かべると笑いが込み上げる。

「ちょっと自分だけ笑わないでよ。私にも教えてよ。」

「いやね、今、私が幸子をＳＭで責めている姿を妄想していたの。そしたらとても面白くなってくて、、フフフ、、」

「プ、、あなたが幸子を、女を責めるの。へえー、女が女を犯す。想像したら確かに凄いわ。ねえ、妄想ではどんな方法で幸子を責めたのよ。」

「聞くまでもないでしょう。あんたが想像しているような方法よ。ムチ、ロウソク、浣腸の三弾攻撃よ。」

「わあ、浣腸までしちゃったの。」

酒を飲みながら淫靡なことを語る二人の女、アルコールのせいか話の内容もどんどんエスカレートしていく。

「ねえ、百合。やっちゃいなさいよ。」

ふと知美の口からそんな言葉が出た。

「え・・なにを。」

「だからあの女よ。幸子よ。腹いせにＳＭで責めまくって復讐するのよ。百合がさっき想像したことを実際にやるのよ。弱みを握って脅すか、拉致してさらうか、強引にＳＭホテルにでも連れ込んで泣き叫ぶくらいにＳＭ責めをくらわすのよ。どう、恐怖のＳＭレイプよ。」

「ＳＭレイプ」その言葉を聞いた時、熱い何かが込み上げ快感に浸る百合であった。

（あの幸子をＳＭで、さっき私が想像したことを、、）

脳裏の妄想を思い浮かべながら瞳を輝かせ興奮する百合であったが、とんでもない事を
考えている自分を抑えて我に帰ると、冷静さを取り戻すのであった。

「ＳＭレイプって、、なに言ってのよ、知美。そんなの犯罪よ。出来るわけないじゃん。」

「フフフ、何本気にしてるの。冗談に決まっているじゃない。でも百合、一瞬
本気で考えたでしょう。なんか目がマジになっていたわよ。」

「馬鹿ね。そんな訳ないでしょう。」

それから二人でしばらくショットバーで飲みながら話し込むのであったが、
百合は知美の言葉「ＳＭレイプ」が離れず、頭の片隅で思い浮かべては興奮と優越に
浸るのであった。

――――――――――――翌日――――――――――――

「おはよう。」

「おはよう、百合。」

社内に響く百合の朝の挨拶、その声は美しく透き通っている。
行き交う同僚にさわやかな挨拶をしていつもの廊下を歩き、自分の席に向かう百合で
あったが、正面から幸子の姿を確認した瞬間、急に気分が急転するのであった。
幸子を無視する事も出来ず、仕方なく挨拶を交わす。

「主任、お、、おはようございます。」

百合が挨拶をすると、幸子は立ち止まり百合に冷酷な口調でゆっくりと話し出した。

「ねえ、百合さん。昨日私の言ったこと分かってくれたわよね。今後は同じような事が
無いように徹底してね。私もいちいち仕事以外の下らないことに関わりたくないのよ。
分かるでしょう。人の上に立つ人間の苦労が。」
幸子の嫌味交じりの言葉に、朝の心地よい気分は一気に崩れさる。
なにも朝一からそんな事を言わなくても・・と百合は思い、幸子への怒りが

さらに倍増するのであった。

「すみません。気を付けます。」

百合は嫌味を言い放ち満足気に去って行く幸子の後ろ姿を改めて観察してみる。
バランスがとれた美しいスタイルに長身の身長、平均以上のバスト、安産型の大きな
お尻、女性の魅力を全て持ち合わせている事に敵ながら感心していた。

（へえー　大きなお尻ね。そのケツを丸出しにしてムチでブッ叩いてやりたいわね。
まったく朝からムカツクことばかり言って、もしも幸子を奴隷に出来たなら、あの尻を
徹底的に責めてやりたいわね。あ、・・いけない、いけない。まったく私ったらまた妄想を、、）

百合は昨夜自宅に帰ってからも、知美とショットバーで飲みながら語った幸子への
ＳＭ責めの話を忘れられずにいた。
知美のほんの冗談であったが、それを頭の中でリアルに再現していた。

（どうしたのかしら、私。駄目よ、そんなこと。ハアハア、考えちゃ駄目。うう、）

しかし、そんな事を思えば思う程、返って逆効果に繋がってしまう。再び頭の中で
変態的な過激な妄想を繰り返すのであった。

（ほら、お尻。幸子、ケツ出しなさい。尻の穴まで見てあげる。好きなんでしょう、変態
プレイが。肛門を見たあとはそこに指を突っ込んであげるわ。そのあとは浣腸よ。
覚悟しなさい。）

妄想の中で幸子を素っ裸にして変態プレイで責める百合。
女を責めることがこんなにも楽しくて興奮するものなのか、百合は自分の中に新しい性癖
を発見しまった事に動揺していた。
就寝中もそんな妄想を繰り返しながら一人で悶えていると、興奮のせいか体が熱くなり、
鼓動も激しくなってきた。
そして最後にはなんと自分の陰部から、愛液が溢れてきた。
流石にその事態に百合は驚き、自分が今まで知らなかった一面を感じてしまった。
まるで、これから眠っているもう一人の自分が覚醒するような錯覚に陥っていた。

百合は朝の嫌な出来事を少しでも忘れたい為に仕事に打ち込んでいたが、集中すること
が出来ない。

（なによ、あの女。朝からあんなこと言わなくても。あー、、、もう、ムカツク。）

イライラした気持ちが治まらない百合。その原因を作った人物が座るディスクに視線を
合わすと、足を組み堂々とした態度で電話を掛けている幸子の姿が見える。

（幸子、今にみてなさいよ。その澄ました顔を屈辱に変えてあげるわ。・・・・え、私なに
を、、なにを考えて・・・いけないわ・・・）

幸子に対する激しい憎悪のせいか、一瞬頭の中で攻撃的な自分が目覚めてしまった。
百合は異常な発想を必死に抑制していたが、序所にその感覚は強くなり、少しずつ
開放されつつあった。

「百合さん、百合さん。」

妄想を続ける頭の片隅で突然、幸子の声が聞こえた為、危険な妄想を中断し
急いで幸子のディスクに向かう。

「ちょっと百合さん。ボーっとしないでよ。呼んだらさっさと来るの。」

「す、すみません。」

「提出してもらったこの資料だけど、いろいろと直してもらいたいところがあるわ。」

「ど、どこを・・ですか・・・」

幸子は資料の指摘を始めたが、それは内容の事ではなく色の使い方や文章の位置など
それほど重要な事と思えるものではなかった。
客観的に見れば無理矢理、文句をこじつけているようにしか見えない。
幸子のあまりにも細かすぎる指摘に、百合も流石に我慢の限界に達していた。

「あの、それは少し細かすぎるのでは・・」

思わず発してしまった言葉に百合は後悔したが、後の祭りであった。
幸子が百合の抵抗を待っていたかのように食らいつく。

「なに、私に意見するの。私はあなたの上司よ。分かっているの。」

言い掛かりつけて部下を非難する。いつも通りの幸子の鬱憤晴らしが始まった。
百合は過去に何回か同じような事を受けてきたが、「いつものことかと」割り切れて
いた。
しかし今回は何故か腹が立ち、湧き上がる感情をコントロールする事が出来なかった。
それは、百合の深奥の中に眠る本来の性格、嗜虐性が強く攻撃的なもう一人の自分が
目覚めようとしている兆候であった。

（この女、もう許せないわ。覚悟するといいわ。）

百合は激しい怒りと憎しみを秘めて、復讐の手法を頭の中で思い浮かべていた。
数日後、知美を呼びいつものショットバーで待ち合わせをする百合であった。

「どうしたのよ、百合。また会社の愚痴。」

「いいえ、知美。もう会社は辞めてもいいと思っているの。」

「あら、そうなの。もっと早くすればよかったのに。これでＳＭを本業として
頑張れるわね。」

「そうね。でもね、このままじゃ終れないの。私、やるわ。」

「え、、どうゆうこと。」

「幸子、あの女を許さないわ。このまま退職しても気が済まないわ。」

「百合、あなた本気なの。」

「ええ、当然よ。私一人でもやるわ。知美、どうする。一緒にあの女を
ＳＭレイプしない。」

「フフフ、アハハハ。なんだ。私と同じね。前、私が言ったＳＭレイプの事、あれ実は半分本気だったのよ。同姓をＳＭで無理矢理責めるってすごく興奮するじゃない。最近お金には困ってないけどね、新しい刺激を求めているの。」

「そう、じゃあＯＫね。まあ、あなたなら絶対に協力してくれると信じていたけどね。」

「当然よ。フフフ。」

「心強いわ。さっきは私だけでもやるって言ったけど、やっぱり一人だと不安だわ。
知美が手伝ってくれれば鬼に金棒よ。」

「そうよ。絶対にうまくいくわよ。」

「さっそくだけど、計画の打ち合わせをしましょう。」

それから百合と知美はしばらく幸子への復讐方法を丹念に検討し、計画を立てのだった。
その残酷するぎる陵辱方法は尋常ではなく、もしこの復讐が実際に行われたら幸子は
かつてない地獄を味わうであろう。

「どう、こんな感じで。」

「案外計画がスムーズに決まったわね。もう一度おさらいしとこうかしらね。」

「まず幸子の会社帰りを待って、人気のないところでクロロホルムを使って気絶させる。
その後、車に乗せて予約したＳＭホテルに直行。そこで恥かしい写真やビデオを
撮って、それを元に脅して復讐する。単純な計画に思えるけど、確実な方法だわ。」

「そうね、でも百合が奴隷からクロロホルムをもらっていたなんてね。使い道が出来て
よかったわね。」

「ええ、昔、医療関係に携わる男から入手したの。いつか使う機会があって役に立ちそう
だったからね。まさか、こんなことに使うなんてね。」

「で、いつ決行するの。」

「明日よ。もう待ちきれないわ。私、すぐにでもあの女の泣き顔が見たいの。」

「わあ、なんかワクワク。今日は眠れるかしら。」

「明日、私は会社で幸子が退社するのを見届けて、知美に携帯で連絡するわ。多分 21：00

位になると思うわ。
その後、知美は車で会社に迎えに来て。先回りして幸子の自宅前で待ち伏せするわ。
丁度、人目のつかないところがあるから、幸子が帰宅してきたところで作戦実行よ。」

「フフフ、そんなリアルな計画を聞くと燃えるわね。あ、、ＳＭホテルの予約をしないと。」

「もう予約はとってあるわ。一通りの道具も用意してあるから大丈夫よ。ムチ、ローソクにバイブレーター、アナルバイブ、拘束具。そして忘れてはいけない浣腸。これは絶対にしてやるわ。」

「ぷぷ、、可哀相な幸子さんね。まさか明日、お尻に浣腸されるなんて夢にも思わないでしょうね。ねえ、ねえ、どんなウンコすると思う。」

「あの女、見た目は清楚で華やかだけど、きっとウンコは臭くてぶっといのを
垂れ流すわよ。」

「最高ね。こんなことって妄想や官能小説の世界よね。マンコもじっくり見てやるわ。
キャリヤウーマンのマンコとアヌスはどんな形なのかしら。」

「ねえ、知美。私、ＳＭやっていて本当に良かったわ。こんな刺激的なことに出会えるなんて。」

「そうよ。私に感謝しなさいよ。」

「ええ、本当ね。フフフ、今日は私のおごりよ。好きなだけ飲んでちょうだい。」

（ああ、早く明日にならないかしら。いつも他人を見下して怒鳴っていたあの女が、私に泣きながら許しを乞う姿を想像しただけで、愉快でたまらないわ。）

笑みを浮かべ楽しそうに喋る百合と知美、話の内容がまさか卑劣な残虐行為だとは、周りからは想像もつかいであろう。
それから二人は酒を飲みながら明日の復讐に向けて語り合うのであった。

次の日、百合は久しぶりに心地よい朝を迎えていた。今日はいよいよ復讐の決行日である。
その為、胸がはずみ嬉しくてたまらない。

自宅を出ていつもの経路で会社に向かい、自分の所属する部署、デザイン一課に入り挨拶を交わす。

「おはよう。」

いつも以上のさわやかで美しい声の挨拶。

「おはよう。百合。」

「おはよう。」

同僚からの挨拶に笑みを浮かべて返し、自分の席につく百合。
幸子のディスクに目線を向けると、既に本人は出社し席についていた。
いつもは顔を見るだけでも嫌な気分になるのだが、今日は全く違っていた。

（来ているわね、幸子。さあて、今日は今までの行いを死ぬ程後悔させてあげるわ。）

朝の始業時間が来て通常業務が始まるが、復讐計画の事で頭が一杯な百合は、仕事の手が疎かであった。

「ちょっと、〇〇さん。なによ、この報告書。」

幸子の席から部下を叱る声が響く。もはやそんなことは珍しくなく、見慣れた光景であった。
時には怒鳴り、時には冷静に見下したような口調で部下を叱り付ける。
その姿は行き過ぎた行為であり、デザイン一課の女達は全員が嫌悪していた。

「百合さん、ちょっといい。」

幸子が百合を呼び昨夜提出した資料の指摘を始め、いつもの嫌味交じりの
説教を始める。

「だから、私の言った事はそうじゃないよ。理解してよね。」

（ふん、威勢がいいのも今日までよ。明日からあなたは私の奴隷よ。フフフ、この女裸に引ん剥いてマンコとケツの穴を見てやったらどんな顔するかしらね。）

ＰＭ17：30 分、終業時間の放送音が鳴り響く。

（ああ、やっと終ったわ。でも定時時間の終了だから、まだ先は長いわね。）

百合は今日程、会社での 1 日が長いと感じた日はなかった。作戦決行の時間が近づくにつれ、胸の鼓動が早くなる。
ふと幸子のディスクに目を向けると、幸子はいつも通り退社する気配はない。

（よし、よし。作戦の第一段階。私も残業をして幸子が退社する時間まで残る。）

百合はちょうど作成納期は迫った資料があった為、それを口実に残業し、幸子を
監視しながら仕事を行う。

それから数時間後、ＰＭ21：00。

幸子が業務を終え、帰宅の準備をし、百合の席に近づいてきた。

「あら、百合さん。まだいたの。さっさと仕事を終らせて帰ってね。無駄な残業は
会社にとって不利益よ。」

「ええ、分かっています。もう帰るところですので。」

幸子はいつもの嫌味で部下を嘲笑うと、さっさと退社していった。

（やったわ。ついに帰ったわ。あの女。よし、知美に連絡。早く、早く。まったくあの女。
なにがささと帰れよ。自分も残業しているくせに。まあ、いいわ。今の言葉が最後の
嫌味よ。明日からは奴隷に変えてやるわ。）

携帯で知美に連絡を入れ、第一段階の計画が順調な事を告げ、会社に車で来るように伝える。

「早く、はあ、はあ、なんか興奮して、、うううう・・ゾクゾクするわ。」

それから10分後、知美の車が到着し、百合が乗り込み待ち伏せの場所へ向かうのであった。

「早く、早く。知美。」

「大丈夫よ。そんなに慌てなくても。時間には余裕があるわ。それよりもクロロホルムの用意は大丈夫なの。」

「ええ、当然よ。ああ、本当にやるのね。私、今日程、1日がこんなに長く感じた事ないわ。」

「私もよ。楽しみね。ＳＭホテルの予約もバッチリだし。フフフ、、」

「実はね、私、今日のＳＭレイプの事を想像すると興奮して、アソコが熱くなって来て濡れたのよ。もう仕事所じゃなかったわ。」

「あら、あなたも。私もよ。フッフフ、、人生で最高の楽しみってわけね。
さあ、行くわよ。」

ハイテンションの気持ちを押さえられず、アクセルを踏みスピードを出し短時間で予定の待機場所に辿り付く。

「来たわよ、来た。あれが幸子よ。このクソ女、今に見てなさいよ」

「もう、あんまり興奮しないでね。百合のクロロホルムが一番大事なんだから。
手元が狂って失敗なんかしないでね。」

「大丈夫、任せてよ。ウフフ。さあ、作戦決行よ。」

クロロホルムを持った百合は車から降り、幸子の後を付けていくのであった。月も出ていない暗闇の夜、それはまるで今から始まる地獄の復讐を歓迎しているようであった。

（さあ、やるわ。やるわよ。）

百合はハンカチにクロロホルム適量分を充分染み込ませて、幸子との距離を序所に詰めていく。
辺りは暗闇であるが、辛うじて幸子の姿を確認する事は出来た。

張り裂けそうな百合の鼓動、今までに感じたことのない感覚にとらわれ異常なまでに
興奮している。

（はあ、はあ、やるわ。闇に乗じてやってやるわ。大丈夫、絶対に成功するわ。）

いざ幸子を目の前にすると、すぐに行動には移せず躊躇するのであった。
いくらＳＭで嗜虐性の強い百合でも、いまからの行動は人生初めての経験である。
クロロホルムを使い気絶させるなど、小説やテレビドラマではよくある話だが
実際にする人間などそういないであろう。
葛藤する脳裏の中で強い不安もあったが、それと同時に全身を駆け巡るような快感も
湧き出ていた。
百合は高ぶった気持ちを落ち着かせようとする為、一度歩行を止めて立ち止まる。
そして大きな深呼吸をして冷静さを取り戻し、周りに人がいない事を再確認すると
前方の幸子に向かって走り出し、片手に持ったハンカチを後方から幸子の口元に
向かっておもいっきり押し付けた。

「・・・・ふ、、がああ、、ふが・・・」

ハンカチで押さえられた口元からそんな呻き声が聞こえたが、それは一瞬だけであった。
数秒で意識を失った幸子は大した抵抗もせずに、その場に倒れてしまった。
目は閉じて手足はピクリとも動かずに、まるで眠っているようである。

「や、、たったわ。ついに・・・、、、はあ、はあ。」

第一段階である最も重要なクロロホルム計画。何度も頭の中でイメージして繰り返して
いたが、実際に行動してみると胸が張り裂けそうな程興奮し、動揺している百合で
あった。
震える手で携帯を持ち、知美に連絡をして計画成功を報告する。

「と、、知美、、、や、、やったわ、、、せ、、成功、、し、、した、、、早く、、早く、、、車で・・」

「ちょっと、落ち着きなさいよ。百合、あなたらしくないわよ。深呼吸して。周りは
大丈夫なの。人気はない。」

「ええ、、全くないわ。」

「そう、じゃあすぐに行くわ。ああ、なんか興奮するわ。」

携帯を切り、知美の到着を待つ百合であったが、今の心境は不安で仕方なかった。
あと数十秒で知美の車が到着するであろうが、百合にはその時間がとても長く感じていた。

（、、、早く、、知美、、まだなの。はあ、はあ、落ち着くの。大丈夫よ。大丈夫。）

不安を必死に押さえる百合の元に、知美の車が到着する。

「お待たせ。やったわね。大成功。」

「それより早く。早く幸子を車に乗せてこの場を逃げないと。」

「ええ、そうね。二人で抱えましょう。」

「ええ、せーの。ぅぅ、、結構、重いわね。この女。」

百合・知美、二人で幸子を後部座席に乗せると、その場から逃げるようにして
車を急発進させていた。

「はあ、はあ、やったわ。やったわ。とうとうやったわ。あはははは、、、」

「最高ね。フフフフ、、こんなに簡単に成功するなんてね。」

「さあ、もう後には引けないわ。こうなったら徹底的にやるわよ。」

「ねえ、幸子が途中で目が覚めることないの。」

「大丈夫よ。クロロホルムは１時間以上、効果があるみたいよ。」

「そう、安心ね。さあ、ＳＭホテルまでぶっ飛ばすわよ。」

路地から大通りに出て、目的のＳＭホテルに向かう車は、何度も追い越しを
して進み、夜の道を走り抜けるのであった。

「さあ、着いたわ。ここよ。高級ＳＭホテルだから設備は完璧よ。裏口から幸子を運びま

しょう。ここのオーナーとは交渉済みよ。乱交パーティーをしたいって言ったら一晩、
高級な部屋を借りることが出来たわ。フフフ、、まあ私はここの常連だから、
当然だけどね。」

「流石、百合ね。頼りになるわ。」

「そうでしょう。フフフ、でもまさか、ここのオーナーもこんな事が行われている
なんて思ってもいないでしょうね。」

二人で幸子を抱えて裏口からホテル内部へと入り込む。裏口はＶＩＰ会員用の専用入口で
プライベートも確保されている為、安心して気絶している幸子を運べる。

「ねえ、これって犯罪よね。知らない人が見たら通報されるかもね。気を失った女を
二人で抱えて連れ込むなんて。」

「ええ、でもここはＳＭホテルよ。万が一見られてもハードプレイが原因とか言って
適当な言い訳が出来るわ。」

「そうね。なるほど。フフフ、、こんなシーンって映画でよく見ない。
数人で裏切り物や死体をアジトに運ぶ場面よ。まさか、私がこんな事をするなんてね。
人生で忘れられない経験ね。」

「まだまだ、始まったばかりよ。本当の忘れなれない楽しい経験はこれからよ。」

他人に気付かれる事もなく予約した部屋に入り込んだ二人は、すぐに内側から鍵を掛けて
一息つくのであった。

「ああ、やったわ。これで安心よ。」

「本当ね。ドキドキしたわよ。フーーーー、、ねえ、とりあえずビールで乾杯しない。」

「待って、先に幸子を拘束しとこうよ。目が覚めて暴れられたら都合が悪いわ。」

「そうね、あの診察用のベッドに拘束しときましょうよ。」

高級ＳＭホテルだけあって、内部は広くいろいろな道具や設備が揃っている。

高度な防音装置に高級感溢れる部屋の作り。
二人は一通り部屋内部の道具を再確認すると、幸子をベッドに寝かせる。

「ねえ、この女もう裸にしない。なんか私、興奮してきたわ。」

「駄目よ。目が覚めてからよ。屈辱をたっぷりと自覚させるの。」

「そうだったわね。私ったらつい・・・ねえ、でも幸子っていい体しているわ。
後でじっくり観察しないとね。」

「ええ、そうよ。でも、目が覚めたらどんな顔するかしらね。最初は怒り狂うでしょうけど、屈辱を受けた後は恐怖で泣き出すでしょうね。」

「ねえ、一通り道具はＯＫよ。必要な物は全部揃っているわ。ＳＭ道具にデジカメとビデオカメラ。」

知美はビデオカメラの電源を入れると、幸子にカメラを向けて撮影する。

「この女の恥かしい姿を撮ってやれば奴隷も同然ね。フフフ、このビデオカメラに
この女の信じられないような痴態が保存されるのね。幸子の裸、幸子のオマンコ、幸子の肛門。それだけじゃないわ。この女のオシッコやウンコをする姿までね。
浣腸されて泣き叫ぶ姿、その浣腸で無理矢理、肛門からウンコを垂れ流す姿までビデオにアップで映像として記録されるなんてね。はあ、はあ、なんか興奮するわ。ああ、、やだ私ったら濡れてきたわ。」

「もう、知美ったら。妄想よりも準備が先よ。」

「そうね。とりあえず拘束ね。」

幸子は意識がない状態でベッドに寝かされて、その上で大の字のポーズで縛られ身動きを封じられていた。

「ねえ、これで安心ね。目が覚めても身動き出来ないでしょう。」

「ウフフ、ビックリするでしょうね。この女。大声を上げて叫ぶわよ。」

「叫べば叫ぶほど私達は燃えるのよ。この女の叫び声だけでアソコが濡れるかも
しれないわ。」

「わおー、、サディストね。フフフ、今日は楽しくなるわ。ねえ、まだ少し時間あるわ。
ビールで乾杯と行きましょう。」

ホテルの冷蔵庫からビールを取り出し、二人で乾杯するのであった。
これからの行われる復讐について語りあう二人の女の嗜虐心を、アルコールでさらに倍増
するのであった。

「ううう、、一体・・・・」

ＳＭにホテル監禁されてから約１時間後、幸子がゆっくりと目を覚ます。
薬のせいで若干の頭痛を感じる幸子であったが、今は自分の身に起こった事を思い出すこ
とのほうが最優先であった。

「なに、、何処よ。ここ、、いったい、、今日は、、、残業をして、、帰宅してから・・・
そうだわ。いつもの帰り道で、、いきなり、、そうよ、、後ろから誰かが・・・・無理矢理」

完全に目を覚まし記憶を取り戻した幸子は、自分がとんでもないトラブルに巻き込まれた
事を認識すると、得体の知れない恐怖が湧き上がり思わず立ち上がろうとした。

「ぅぅ、、、なに、、やだ、、動けない。なにこれ、、縛られているの、そんな、手足、全部、、
いや、、いや――」

一切の動きを封じられている事態から、犯罪のトラブルに関わっていることを連想して
しまい、恐怖のあまり悲鳴を上げるのであった。
その悲鳴を別の部屋で百合と知美が確認する。

「ねえ、目が覚めたみたいよ。」

「ええ、わくわくするわね。ついに来たわよ。いよいよ開始ね。私が登場したら
どんな顔するかな。フフフ、想像しただけで興奮しまくりね。さあ知美、行くわよ。」

二人は立ち上がり、幸子が縛られている部屋に向かうのであった。

「ようやくお目覚めね、幸子さん。」

「、、な、、誰・・女、、女なの。」

幸子は声の方向に顔を向け、目の前の知美を確認するのだった。同姓の存在に
動揺する幸子であったが、知美の後ろから百合が出てきた瞬間、驚きを隠せなかった。

「な、、、な、、、ゆ、、、百合、、、さん、、、なぜ・・・」

「こんばんは、主任。気分はどうですか。」

「・・・あ、、あなた・・・・まさか・・・」

今、自分が拘束されている状況に百合が関与している事を、察知した幸子であった。
いつもは会社で扱き使い、時にストレスの発散として適当な理由を付けては怒鳴る。
その事に罪悪感を感じることもなく、何度も繰り返して来た幸子だったが、そんな事が
許されるのは企業という特殊な世界の中だけである。
1 日の殆どを同姓が働く会社の中で過ごし横暴を繰り返す幸子は、いつしかその世界が当た
り前だと感じ、時に自分を圧倒的な権力を持つ女王と錯覚していた。
しかし、幸子の今の状況は囚われの身となり、これから罪の制裁を受けようとしている。
仰向けに大の字にで縛られて、恐怖の表情で震える幸子。それはまるで滅ぼされた王国の
女王が囚われ、見せしめの拷問が行われるようであった。

「フフフ、顔色から察したようね。そうよ。あなたを監禁して縛ったのは私よ。クロロホ
ルムで気絶させて、このホテルに連れて来たの。約、1 時間前かしらね。」

「な、、なんて事を・・ただで済むと思っているの。犯罪よ、犯罪をしたのよ、あなたわ。
理解しているの。何を、、したのか。あなた、、」

「ええ、当然、分かっているわよ。私は犯罪を犯しました〜、アハハ。」

「・・・・い, 、一体、何を・・・なんのために・・・・」

「なんのためって決まっているでしょう。今までの仕返しよ。散々、会社では扱き使って、
怒鳴って、いろいろしてくれたわね。毎日、ムカついていたわ。その怒りが爆発した
わけよ。」

「な・・・そんな事で・・・・そ、、それは、、立場上、、、上司と部下の関係では必然的な事じゃ・・あなたの将来の事を考えて・・・」

「私の事を考えてですって。よく言うわね。ストレスの発散をしていただけじゃないの。」

「ううう、、、なに、、が目的よ・・私の事が気にくわないから、、こんな事をして、、
監禁までして、、これから、、どうするの。お金なの。お金がほしいの。」

「主任、私、お金には困っていないの。夜、秘密の仕事をしていてね、その収入で充分な生活が出来るの。だから会社も近い内に退職するつもりなの。
フフフ、、だから退職前に、あんたに恥をかかしてやろうと思ってね。今まで贅沢三昧で好き勝手生きてきた幸子さんに、人生の厳しさを教えてあげるわ。
ごう慢に他人を見下して生きていれば、それなりの報いがあるって事をね。」

「・・・な、、な、、、なにを、、するつもり・・・・」

会話の内容から自分の身にとてつもない災いが降りかかろうとしている事を理解した幸子は、恐怖を感じていた。

「心配しないで、別に怪我させたり、傷をつける訳じゃないわ。ちょっと、恥ずかしい目に会ってもうらうだけよ。」

「は、、恥ずかしい目って・・・」

「幸子さん、女で恥ずかしい目って言ったら大体は想像がつかない。」

「ウフフ、私達二人で、あなたをたっぷりと可愛がってあげるわ。今日の事は一生忘れられないトラウマになるわよ。楽しみにしていてね。」

「・・・・警察に、、、訴えるわよ。あなた達、、タダじゃ済まないわよ。」

「いいわよ、構わないわ。まあ、出来たらの話だけどね。私達がこれからする事を
堂々と口に出来るかしら。」

「な、、なんですって・・・・」

「ねえ、百合。お喋りはもう終わりにしようよ。さっさと始めましょう。」

「そうね、フフフ、、」

二人が不気味な顔つきで、笑っている。その表情に、恐怖と不安を感じた幸子は
本能的に危険を察知していた。

「だ、、誰か―――、、、助けて―――、、、誰か――――」

「アハハハ、、無駄。無駄。この部屋は防音設備ばっちりよ。しかも地下室なの。全然外には聞こえないわよ。」

「・・な、、な、、、そこまで、、いったい何を・・・・私に何を・・・・」

「それは楽しみにしておいてね。フフフ、、ねえ、百合どうする。とりあえず、
脱がしちゃう。」

「そうね、まずは胸でも見ましょうか。」

二人は拘束で動けない幸子に襲い掛かり、ブラウスを引き裂きバストの下着を剥き出しにしてしまった。いきなりの事に幸子は呆然として、状況を把握出来ずにいたが、引き裂かれた自分の服を目視すると、狂ったような叫び声を上げていた。

「な、、なにするの――、、ちょっと、、、」

百合が幸子の豊満で形のいい乳房を下着の上から掌で包み、ゆっくりと揉み上げると、知美は首筋に片手を巻き付かせるようにして密着し、幸子のうなじから滑らかな頬に至るまで唇でくすぐったりして弄ぶ。

「や、、や―――」

同姓に、そんな猥褻な行為をされた事など経験がない幸子は、激しい抵抗を感じ、引きつった悲鳴を上げていた。

「へえ、、主任、おっぱい大きいのね。」

「本当ね。フフフ、こうして近くで顔を見ると結構、可愛いわね。」

「なに、なに、なにするの。ちょっと、やめて、、、」

「あら、そんなに嫌がらなくてもいいじゃないの。今日はいい事、一杯してあげるから
楽しんでちょうだいね。」

百合は右手でゆっくりと下着の上から優しく揉み上げた乳房を力強く握ると、ブラジャーを一気に剥ぎ取ってしまった。

「きゃあああ、、、———」

「なによ、大袈裟ね。おっぱいぐらいでそんな声出してたら、これから持たないわよ。」

「乳首もなかなか、いい色ね。ちょっと舐めてみようかな。」

知美が幸子の右胸の乳首を舌で丹念に舐め上げ、百合は掌に力を入れて揉み解す。

「あああ、、、ああ」

「あら、気持ちよくなってきたの。」

「フフフ、、どうやら気分が乗ってきたみたいね。」

「やめ、、やめなさい、、こんな・・・」

「誰がやめるものですか。フフフ、、さあて、下のほうも拝見させてもらおうかしらね。」

「な、、、下って、、ああ、ちょっと、、やめて、、やめなさい」

百合は幸子のスカートを捲り上げてパンティーを確認すると、満足な笑みを浮かべて
笑っている。

（フフ、、幸子主任、悔しいだろうな。ついにパンティーまで見られて。でもまだまだ
これからよ。）

縛られて身動きが出来ない幸子に加えられる陵辱は、どんどんエスカレートしていく。
上半身はほぼ全裸に近い状態で乳房を露わにして、その部分を知美が手と舌を使って徹底的に責め尽くしている。
力の入った手の強い動きとソフトに滑らかに、丹念に舌で乳房を巧妙に責める知美。
そのテクニックは相当な物で、この異常な状況の中でも幸子に快楽を与えている。

「やめ、、やめて―――」

「ねえ、主任さん。さっきから、やめてって言うばっかりね。頭がいいんだから、もっといろんな言葉を使っ抵抗しなさいよ。これから、もっと酷い事が始まるわよ。」

「な・・・・あなた達一体、、何を、この私に何をするつもりよ――――、、、」

「フフフフ、、だから、恥かしい事って言ってるじゃないの。」

抵抗してもがく幸子を見てたまらなく欲情する百合は、その高ぶった気持ちをさらに
上げようと次の行動に移っていた。
幸子の白のパンティーを掴むと、乱暴に一気に膝下まで下げてしまった。
百合の目の前に幸子の真っ黒で豪快に生えた陰毛が堂々と姿を現したが、それと同時に
幸子の悲鳴もさらに大きくなる。

「へえー、主任って毛深いのね。真っ黒よ。」

「あああ、、ああああああ、、ちょっと、、ちょっと、、こんな、、こんな、、、、」

今だにこの現実を受入れられない幸子であった。つい数時間前までは会社でいつものように、扱き使っていた自分の部下から、奴隷のような残酷な仕打ちを受けている。
これは悪い夢ではないかと思いたかったが、体に感じる感触から現実である事を
否定出来なかった。

「ねえ、知美。ビデオカメラをこっちにも回してよ。この豪快な陰毛を録画してあげて。」

「はーい。フフフ、、」

「録画ですって―――、そんな、ちょっと百合さん、お願い、そんな事やめて、

それだけは、、、」

「駄目よ。こうやって映像に残しておけば、主任も簡単には公に出来ないでしょう。もし警察に訴えると、世間にこの映像をばらまくわよ。まあ、これは保険みたいなものよ。
フフフ、だからね、もっと信じられないような恥かしい事をしてあげる。」

[幸子さん、今このビデオにあたなの恥かしい茂みが映っているわよ。」

知美は幸子をからかいながらビデオカメラを回す。
百合はその傍らで、幸子の絶望的な表情を見て楽しむと、片手で陰毛の茂みに手を伸ばし、強引に掴み左右に引っ張るのであった。

「きゃあああああ――――――」

「主任、このまま一気に引き抜いてあげようか。」

「はああ、、やめて、、やめて――――――」

「やめてほしいの。ウソ。主任ってこうやって苛められるのが好きなんでしょう。」

「そ、、そんな訳ないじゃないの――――、、もういい加減にして――――」

「あら、口の聞き方には気を付けないとね。フフフ、今度はこの茂みの下にあるいやらしい穴を拝見させてもらおうかな。」

「・・・・ま、、待って――――、、そんな、、そんな事やめて――――」

「駄目よ。今まで好き勝手やってきた罰よ。知美、ビデオでしっかりと撮ってね。
いよいよ、幸子主任のオマンコを拝見出来るわ。しっかりと割れ目を開いてあげるわね。」

「いや――――――――、やめて、、やめて、何が楽しいの、、同じ女に、、こんな事、、、」

「いいわよ。もっと叫びなさいよ。私達ね、あなたがそうって泣き叫べば、たまらなく興奮するのよ。」
「フフフ、、私なんて興奮して、アソコが少し濡れてきちゃったわよ。」

「へ、、変態―――、、あんた達、、変態よ―――」

「あら、素敵な誉め言葉を有難う。さあ、お喋りはお終い。」

百合は幸子の足首を固定しているロープを緩めて、太股を掴みM字に足を開脚させて
陰部を露にして、性器をはっきりと外部に晒す。
股間は真っ黒な陰毛に覆われ、その下部に破れた肉、女の穴が存在している。
女の象徴である部分、デリケートなそこを、百合は強引に手を押し込むみ指で
陰唇を開くとピンク色の膣穴が輝いていた。

「はい、ご開帳――　　主任、思ったりより綺麗じゃない。あなたの性格と同じで
ここも汚いと思っていたわ。」

「本当ね。いい色してるわ。ねえ、幸子さん。今まで何人の男のチンポを咥えてきたの。」

信じられないところを人前に晒し、さらにそこを無理矢理広げられて同姓から辱められている。
外気の冷たい空気が膣穴の奥底に感じることにより、この地獄の現実を再認識せざる
得ない幸子であった。

「ああ、、百合さん、、いい加減に・・・・もう、、もうやめて、、お願い、、今なら
許してあげるわ。」

「なに上から目線で喋っているの。自分の立場が分かってないようね。いいわ。思い知らせてあげる。フフフ、、」

百合は、膣穴の上に位置する皮をかぶったクリトリスを強引に剥き出した。

「きゃあああーーー、、やめて、、、」

「はい、クリトリス。幸子さんのクリトリスを拝める日が来るなんて夢にも思わなかったわ。どう、いつもみたいに冷静な口調で怒鳴ってみなさいよ。どうしたの。」

百合は小豆大の大きさのクリトリスに舌を差込み、いやらしい音を立てながらピチャピチャと吸い上げるのであった。
女の一番恥ずかしいところへ舌を差し込まれ陰湿な音を立てられている。幸子の陰核の

皮を舌で剥ぎ、しつこいくらいに舐め回す百合。
その間に知美は幸子の膣穴に中指を奥まで入れ、淫らな音を立ててピストンをしていた。

「あうううう、、はあああああ、、、、」

「あら、いやらしい声を出して、ウフフフ、、主任ったら可愛い。」

風俗の世界を何年も経験して来た二人に掛かれば、素人に絶頂の快感を味あわせる事など簡単な事であった。
百合・知美はプロのＳＭ女王であるが、その相手は男性だけではなく女性も対象であった。同じ女であるからこそ理解出来る性の快感。その道の百戦錬磨の二人に掛かれば、素人の幸子などひとたまりもなかった。

「ねえ、大分感じてきたんじゃないの。」

「そりゃ、そうよ。私達二人の手に掛かれば不感症の女だって、いちころよ。」

女の構造を充分に理解している知美と百合は、幸子の体の状態を手にとるように分かっていた。

「さあ、そろそろバイブを使うかな。ジャーン、見てよ。幸子さん。」

幸子が知美の方を向くと、今まで目にしたことのないような巨大でいやらしい物体が右手に握られていた。
その物体の形状から、どうゆう目的・効果を果たすものであるかは、すぐに理解出来た。

「や、、、やめ、、やめて、、そんな・・・・」

「大丈夫よ。私に全てを任せれば気持ちい良い思いが出来るわ。ウフフ、、。」

知美はニッコリと幸子に笑顔を向けると、バイブレータをピンク色の膣穴にゆっくりと沈めていった。

「あ、、、あうううう、、あがあああ、、、」

気が狂ったような喘ぎ声を出してもだえる幸子であったが、無常にも知美はﾊﾞｲﾌﾞを

動かし女の快楽の場所を刺激していく。幸子はその行為に不快を感じていたが、
知美のﾊﾞｲﾌﾞの絶妙な使い方と、クリトリスを刺激する百合のテクニックで体は
かつてない程の快楽を感じていた。

「はうううううう、、はあああああ、、はあああああああうう、、」

「ねえ、百合。どうする。このままイカせるの。」

「そうね。とりあえずそうしましょうか。」

「いいの。すんなり快感を与えて。」

「いいわよ。この次は、お尻を攻めるから。フフ、例えるなら地獄を味あう前の
ささやかな楽しみ。昔だと死刑囚が前日に、最後の餞としてごちそうを食べるじゃない。
あれと一緒よ。」

「フフフ、なるほどね。じゃあ、さっさとイカせてアヌスを拝見させてもらいますか。
私ね、実は早くそこを見たくてウズウズしているの。」

「あら、私もよ。ついにこのクソ女のケツの穴を見られる思うと、愉快で仕方ないわ。」

幸子に聞こえないように耳元で小声で話す二人であったが、その話声に気を向ける
余裕など今の幸子にはなかった。
今、体中を覆う経験した事のない快感をどうやって抑えるか、それだけに集中している。

「さあ、一気にイカせてあげるわ。」

百合の舌の動きが早くなりクリトリスを刺激し、知美はビデオを左手で回しながら右手で
ﾊﾞｲﾌﾞを激しく動かす。
二人共、がむしゃらにやっているのではなく、正確に快楽のツボをつきGスポットを
刺激しているのだ。今まで同じ女を責めてきた数々の経験から、成し得る技である。

「ああ、、あうう、、ふあああ、、ふあがあああ、、、」

「さあ、いよいよね。おもいっりイキなさい。」

「あああああ、、あっがあああああ、、　　ア、、、アアハアアアア」

一瞬、幸子の体が激しく浮き上がったかと思うと、その後小刻みに震えている。

「フフフ、、イッたようね。」

身体の奥底から溢れ出てくるような快楽の浸透感。
それは今まで経験したセックスなどでは感じた事のない、未知の何かであった。
幸子はその快楽に身を任せて呆然としていたが、すぐに正気を取り戻すと
今度は別の感情、絶望・陵辱・嫌悪感が無限に溢れてくる。
我を忘れて女の快感を部下である百合から与えられたなど、受け容れ難い屈辱であった。
幸子は今だに僅かな快楽の余韻を残している自分の身体が情けなく、悲しみと絶望の淵を
彷徨っていた。

百合・知美は、呆然としている幸子の拘束を一度解き、脱がしたパンティーをもう一度履
かせて、新たな凌辱を開始しようとしていた。
わざわざパンティー穿かせた理由は、幸子に肛門を見られる屈辱を弄りながらジワジワと
与える事と、百合・知美の念願の目的であった幸子のもう一つの「穴」を、ゆっくりと楽
しみながら拝みたいと思う気持ちからの事であった。
手足を固定していたロープを解かれても幸子は抵抗せずに、二人に身を任せていた。
百合と知美は幸子を四つん這いにして、両手首を膝の裏側でベルトを使って固定する。
さらに幸子に首輪を付けて、ベッドに取り付けられているフックと結ぶ。
これにより、幸子は頭を上げる事が出来ずに這い蹲り、尻を高く天に向けて高く突き
出す姿勢となる。

「あらら、大人しくなったわね。フフ、まあ女にイかされたショックで
そうなるのも無理ないか。」

――パシィィィン―――

百合が幸子の尻をパンティーの上から軽く叩いた。それが引き金となり、幸子は
我に返る。

（ううう、、、私は、、、そうよ、、女に、、あれ程の、、、屈辱を・・・・うううううう、、）

悲しみに打ちのめされて惨めさを実感する幸子であったが、そんな事を忘れさせる
更なる不幸が始まろうとしていた。

「うう、、なに、なに、、動けない。身動きが、、、あああああ、、なによ――」

自分がどんな格好をして、どんな姿をしているのか再確認した幸子は、激しい
羞恥と怒りで動揺する。

「、、こ、、こんな、、こんな姿、、まるで、、犬みたいじゃないの。あああ、、
ちょっと、、百合さん、、百合さん、、」

「何よ、うるさいわね。そんなに叫ばなくても此処にいるわよ。」

「百合さん、これどうゆうつもり。こんな格好、早く解いてよ――」

「なに言ってるのよ。今から第2ラウンドを始めるのよ。」

「な、、、な、、、な、あなた、まだ何かするつもりなの。あれ程の事をして、、
私にあんな酷い事をして、、、まだ、気が済まないの、、」

「なにが「あれ程のこと」よ。さっきは幸子さんが一番喜んでいたじゃないの。
あんなに楽しんで気持ちいい思いして。
私達はね、幸子さんが楽しむ姿を見ても面白くないの。苦しむ姿を見たいのよ。」

「、、た、楽しんだでっすって、、、だ、誰が、、楽しむわけ、、ううう、、あなたは、
どこまで、、
許さないわ。私はあなたを絶対に・・・・」

「フフフ、、いいわよ。その調子よ。やっぱり主任はそうじゃないとね。
そうやって、抵抗してくれた方が私達も楽しめるわ。」

「やりなさいよ――、好きにすればいいじゃないの。そのかわり、後で後悔させて
やるわ。」

「あら、そう。それは楽しみに待っているわ。じゃあ、早速やらせてもらうかな。

知美、ビデオお願いね。」

二人は幸子の後、高く突き出た尻の方に向かい新たな陵辱を再開しようとしていた。
拘束義で無理矢理とらされた姿勢のせいで身動き一つ出来ない幸子は、自分の後ろで
二人が何を始めようとしているのか不安になり、首を動かし確認を試みたが全く
自由が利かなかった。

（、、、いったい何を、、、うううう、、さっきはつい、好きにすればいいって言ったけど・・）

咄嗟に洩らした言葉に激しい後悔を感じて震える幸子であったが、今更どうしようも
なく、これ以上酷い行為をされないように祈る事ぐらいしか出来なかった。
後ろに回った二人はしばらく幸子の形が良く大きなヒップを見つめて、これからの
最高の陵辱を頭の中で妄想していた。

尻を高く天に突き出したポーズ、その尻を覆っている真っ白なパンティー、左右の臀部は
完全に割り開かれている。もし、このパンティーを脱がしてしまえば左右に割れた尻肉の
せいで、普段は谷間奥深く隠れている肛門は完全に外気に触れてしまう。
知性を持った人間であれば、見られるだけでも顔を赤面してしまう部分が露になるのだ。

「大きなお尻ね。幸子さん。ねえ、ヒップどのくらいあるの。」

「・・・・」

「あら、無視するの。そんな事していいのかな〜〜。」

百合は右手の中指を突きたてて、幸子の尻の谷間の中央に押し当てた。その中指が
ちょうど、パンティー越しに幸子の肛門を的確にとらえていた。

「きゃあああああ――――――、、、な、、なにするの――――――」

予想外のとんでもない場所に刺激を感じて悲鳴をあげる幸子であった。
パンティーの布が指の圧力で肛門に当たり、その感触が括約筋全体を伝わると
一気に脳天まで響く。

「ごめんね、主任。大きなお尻だから穴を間違えちゃったわ。どこが肛門で、どこが

オマンコか分からないわね。」

百合の子供騙しの言葉を聞き、幸子の怒りが高ぶる。「穴を間違えた」と言いながらも
百合は、幸子の肛門に指を当てたままクネクネと刺激を与え続けている。

「ふ、、ふ、、ふざけるのも、、いい加減にて、、そんな子供みたいな事をして、、何が楽しいの。」

「あら、失礼ね。ちょっと間違えてお尻の穴に触れただけじゃないの。
仕方ないでしょう。パンティーのせいで何処がお尻の穴か分からないもの。」

この女達の次の標的はまさか肛門では、、っと想像すると、幸子はあまりの
おぞましさに総毛立つ。
この世の中には排泄器官である肛門を、性の対象とする変質者がいる事は幸子も認識している。
それはお互いが同意の上で成り立つ事であるが、辱めや凌辱を目的にするとなれば
許しがたい行為である。

「いい加減にしなさい――――――、、触らないで――――」

頭の片隅で同性二人から肛門を辱められる事を想像すると、身動きが出来ない状況であっても抵抗せざるを得なかった。

「いいじゃないの。ちょっと、お尻の穴に触れたくらい。減るものじゃないし。ウフフ、、」

「ねえ、幸子さんはお尻でセックスした経験無いの。」

「あ、、ある訳ないでしょう――――、、何を言って、、、」

「そうかしら。今の世の中、アナルセックス位、大した事じゃないわ。
肛門もね、鍛えればそれなりの快楽を得られるわよ。ウフフ」

百合は右手の中指の動きを止めずに、僅かな巧みな動きで幸子の肛門を刺激している。
その指の動きはまるでミミズや小さな虫が這うような異常な感触であり、快感とは
程遠いものであった。

「ちょ、、ちょと―――、、もう、、、、やめて。指を、指動かさないで―――」

「あら、駄目よ。幸子さん。今からあなたは、この汚い穴で快楽を感じるようになるのよ。そのためには、しっかりと解しておかないとね。」

「な、、なんですって、、」

「お尻の穴の快感を私が教えてあげるのよ。幸子主任は経験ないみたいだからね、最初は優しくソフトにしてあげるわよ。」

「や、、やめて。やめなさい、、本当に、、やめなさいよ―――」

「お尻の穴」と聞き連想する一番の事は、羞恥以外にはなかった。
健康な人間であれば肛門を他人に見せる事など、まず有り得ない。

一部の限られた変態は肛門性交という行為を行うであろうが、自分とはかけ離れたものであると認識している。
百合の口から出た「アナルセックス」「肛門」の単語に激しい羞恥心を感じていたが、それと同時に脳裏で最悪の展開を想像する幸子であった。

「本当に、、やめて、、やめなさいよ―――」

「あら、人が折角ソフトにマッサージしてあげているのに。いきなりお尻の穴に指を入れたら痛いわよ。」

「な、、、何を、、言って、、百合さん、正気なの、、、、よく、そんな事を、、」

「幸子主任、私はこうゆう世界で生きているのよ。ムチで叩いたり、ローソク垂らしたり、縛ったりして男を調教するＳＭの女王様なの。」

幸子は自分の身に起きた事を振り返れば百合の変態性癖のカミングアウトも、それほど驚く事ではなかった。
監禁、拘束、同性である女からの辱め、そして今度は肛門に狙いを定めるような言い回し。
この状況を考えれば今からそう遠くない未来で、尋常では無い屈辱を受けると察している幸子は、なんとか切り抜ける方法を模索する。

「・・・・百合さん、、とにかく、、、もうやめて。今やめれば、、今日の事は水に
流すわ。」

「あなたに死ぬ程、辛い屈辱を与えるまで、やめないわよ。
今日は今までの仕返しとして、気が済むまでやらせてもらうわ。女を辱しめる方法はね、
ＳＭの世界じゃいろいろとあるのよ。」

「ウフフ、、百合はね、ＳＭ界じゃ有名なスターよ。そんな彼女を怒らせて、恨みを買う
なんてね。
でもお尻の穴も慣れればそれなりに良いものよ。まあ、幸子さんには快楽よりも恥ずかし
い思いをしてもらいたいから、意地悪な方法で、いろんな事をするけどね。
フフフ、第2ラウンドは幸子さんのお尻の穴が主役よ。たっぷりと楽しみなさい。」

見る見る内に幸子の顔は真っ青に変貌していく。
こんな異常な性癖の女が今まで自分の部下であったとは信じ難い。
幸子はこれから先、耐えられないような屈辱に泣き叫ぶ自分の姿を想像すると、たまらな
くなり悲鳴を上げて助けを求める。

「だ、、誰か――、、お願い、、助けて――、、誰か―――」

「駄目よ。幸子さん。ここは地下の防音装置が付いている部屋よ。大きな声出しても、無
駄よ。」

「うう、、あたな達、、こんな事して、、タダで済むと思っているの。」

「当然、思っているわよ。ウフフフ、、そんな強気な態度も、肛門を見られると
すぐに変わるわよ。」

「ウフフ、楽しみね～～、、幸子主任のお尻の穴。ビデオにしっかりと録画してあげるわ。」

「私達ね、今まで数え切れない位、男達のお尻の穴を見てきたけど、女の肛門はあまり見
た事ないわ。ウフフ、幸子さんの肛門はどんな色で、シワの数は何本あるのかしら。」

「こ、、肛門って、、、何のために、、、そんな、そんな事、、意味のない事はやめてー」

「ウフフ、、意味は充分にあるわよ。あなたに屈辱を味合わす方法としては打って付けよ。

人前でケツの穴を曝け出す事が、どれ程の屈辱か思い知るといいわ。」

完全な逆恨みの為に肛門を見られるなど、理解し難い事であるが、それは確実に自分の身に起ころうとしている。
低能でバカげた行いではあるが、他人に肛門を見られ笑いものにされる事を想像してみると、その羞恥は計り知れないものである。

「さあ、行くわよ。」

百合が幸子のパンティーを指先で掴むみ、ゆっくりと下ろす。
白のパンティーと肉の肌色がなんとも言えない絶妙なエロティックを表現して、興奮を高揚させる。

「ちょ、ちょ、、ちょっと、待って―――、、お願い、、待って、、見ないで、、そんなところ、、」

すぐにはパンティーを下ろさずに、一度下げてはまた戻しを数回繰り返す。
その焦らした動作は、百合と知美の興奮を高める材料になっていたが、幸子にとってみれば、気が狂う程の辱めであった。

「ゆ、、百合さん。お願い、、もう、、許して、、私が、、悪かった、、わ。
お願よ、、お願い。やめて、、」

「あら、どうしたの。いつもの主任じゃないわね。駄目よ、もっと気を強く持たなきゃね。
部下の前でそんな弱気を見せてどうするの。上の立場の人間は常に堂々としてなきゃね。
それが、たとえ肛門を見られようともね。」

「プゥ、、アハアアアア、、百合ったら面白い事言うのね。最高――、、」

「幸子主任。見せてもらうわ。覚悟を決めてね。ウフフフ、、アハハハ、、、」

百合は幸子のパンティーのゴムを指先で掴み、一気に太股まで下ろしてしまった。
同時に幸子の悲鳴が地下の SM ホテルに響く。
百合と知美は息を飲み込みながら目の前に現れた光景を見つめて、興奮していた。
幸子の尻は四つん這いの姿勢のせいで、普段は塞がっている尻の割れ目が完全に左右に広がり、本来は外界に出る事はない小さな穴が露出していた。

綺麗な茶色の肉、痔や外傷などは全くなく、中心の穴に集中しているシワ。
今まで男女の肛門を何度も見て来た百合・知美であったが、その中でも幸子のアヌスは
美しい形をしていた。

「へえー、幸子主任のお尻の穴って、綺麗じゃない。」

「そうね、思わず見とれたわよ。今まで何人もの肛門を見てきたけど、その中でも
トップクラスよ。流石素人ね。」
「まあ、SM の常連客だと肛門にいろんな異物を突っ込んでいるから、形が崩れるのも
当たり前だけどね。」

「ねえ、幸子さん。なんか喋りなさいよ。」

「・・・・・」

体を小刻みに震わして必死に耐える幸子は顔を伏せて沈黙している。
パンティーを降ろされたせいで、尻全体に地下室の冷たい空気を感じているが、一番
実感出来る部位は肛門である。
普段は肉と肉に挟まれて、一定の温度で保たれているせいで殆ど意識する事がないが、
外気に晒すと粘膜で感知する感覚は非常に敏感なものであった。

「ねえ、幸子主任ったら。」

百合が幸子の肛門に向かって、フ―っと息を吹きかけた。

「きゃあああ――――――――」

まるで息を吹き返した魚のように、幸子は全身を反応させて悶える。
百合の生暖かい息が幸子の肛門を直撃したせいで、瞬間的に肛門を「ぎゅ、、」っとすぼめ
てしまった。

「アハハハハハハ、、イソギンチャクみたい。」

「アハハハ、、締まりが良い立派なお尻の穴ね～～、、人前で芸として披露できるわよ。」

二人の全く遠慮のない笑い声に、幸子は身が引き裂かれるような思いで耐えていた。

「今の見た。面白いわね〜〜。肛門だけ別の生き物みたいね。」

「しっかりと録画したわよ。後で見ても笑えるわよ。」

「あなた達、、こんな事して、、私は絶対に許さないわよ―――。」

屈辱と羞恥を押し殺しながら抗う幸子を百合は満足げに見下しながら、肛門の穴の中心に中指を押し当てた。

「キャァァァ――――、、何を――、、、ちょっと、、いや、、触らないで―――」

肛門の肉を指先でツンツンと突付き、独特の豆腐のような手触りと、無数のシワが指に当たる時の僅かな粘着感を、子供のように楽しむ百合。

「触る位、いいじゃない。こんなにも堂々と肛門を見せ付けられたら、悪戯したくなったわ。」

「あなたが無理矢理やった事じゃないの――、、もういいでしょう。
もう見たのなら、やめてよ―――」

「主任〜〜、そんなに怒らないの。綺麗なお顔と肛門が台無しよ。」

百合は幸子の肛門に当てていた中指を少しずつ強く擦り付けていき、序所に肛門の内部へと押し込もうとしていた。

肛門の内部、直腸に向かって強引に進もうとする百合の中指に、恐怖を感じた幸子は動けない体で必死に抵抗し進行を阻止しようとしていたが、その効果は皆無であった。
指先が僅かに、幸子の肛門内部に入り込んでしまった。

「ちょ、、ちょ、、まって――、、やめて―――、、い、、いっ、、痛いぃぃ――」

幸子の悲鳴を聞き興奮する百合は、さらに指を内部に侵入させようとしたが、ローションもなくいきなり直腸内の深奥に進めて行く事は、困難であった。

「やっぱ、いきなり入れるのは無理か。」

百合は一旦、指を肛門から離すと、その中指を自分の鼻先に持っていきクンクンと
臭いを嗅ぎ、強烈な悪臭を再確認する。

「ウフフフ、、幸子主任。くっさ〜〜いわよ。ちゃんと拭いているの。お尻の穴。」

肛門の匂いまで他人から指摘された幸子は、湧き出す感情に押し潰されそうであった。
「ふざけないで、、」っと震えた小声でボソっと返したが、幸子にとってその抵抗は
優越感を高める材料でしかなかった。

「百合、そんなに肛門が臭いなら、ウンコ付いているかもよ。ケツの穴を広げて、奥まで
しっかりとチェックしてやろうよ。」

知美の提案に幸子は今朝、自宅のトイレで済ませた用便のことを思い出した。
もし、そのときの名残がほんのわずかでもアヌスに付着していたらと考えると、恥ずかし
さに耳の付け根まで赤くなった。

「やめて――――――、、もう充分でしょう。もうやめて――――、、」

百合・知美は二人で幸子の尻肉を左右に引っ張り、肛門を広げようとする。それに対して
幸子はギュ、っと肛門に力を入れ必死にすぼめる。

「ねえ、何のつもり。何で肛門を閉じるの。開きなさいよ。」

「肛門の奥までチェックするから、ウンチする時みたいに気張りなさいよ。」

「いい加減にしないさよ――、、、こんなの犯罪よ――、、あんた達、許さないわよ――――」

「ウンコをチェックするだけでしょう。なに大袈裟な事を言っているの。」

「主任、さっさと肛門を開きなさい。抵抗するならこのビデオ、会社でバラするわよ。」

「な、、なんて、、卑劣なの。そんな事をして恥ずかしくないの。」

「自分の事を棚に上げて何を言うの。卑劣さだとあなたの方が上手でしょう。
そんな事よりも、早くケツの穴を開きなさいよ。」

幸子は口惜しい気持ちを抑えならが、肛門の力を抜くと緩んだ輪状の肉は面積を広げて中心部が盛り上がる。

「ウフフ、素直になったわね。じゃあ、ウンコチェックしましょうね。」

知美はおちょぼ口のような幸子の肛門を指先でグイっと左右に抉じ開け、奥の奥に潜むピンク色の直腸壁まで剥きだしにする。
臀丘の谷間は底まで割られ、排泄器官である粘膜を指先で広げられ、文字通り奥の奥まで全てを曝け出す屈辱は、何事にも変えられない辱めであった。

「どう、ウンチは付いているからしら。」

「そうね〜〜、、どうかしらね。よ〜〜〜く、確認しないとね。」

「すごく臭いケツの穴だから、きっとウンコが付いているはずよ。」

「あ、見て見て。これウンチじゃない。アハハ、、きったな〜〜い。」

「主任〜〜、仕事が忙しいのは分かるけど、ウンチを拭く時間位は作らなきゃね。」

肛門に排泄物の拭き残しなど無かったが、百合の言葉を鵜呑みにした幸子は、羞恥と屈辱に頭が白く灼ききれるようだった。

「そ、そんなに広げて見れらたら、、誰だって、、少しくらい付いているわよ――」

「そんな事ないわよ。肛門にウンコが付くなんて珍しいわよ。恥ずかしい女ね〜〜
ウンチ位、人並みに拭く事も出来ないの。」

「いつもは厚化粧して清楚に見えるけど、肛門にウンコ付けて、最低な女ね。
しかもくっさ〜〜いケツの穴までして、あんた一体何、食べてるの。」

「ふ、、ふ、ふざけるな―――　あ、、あ、あんたに、、あんたなんかに、、臭いって誰だって同じよ。当り前よ――――」

「主任のお尻の穴は特別に臭いわよ。ねえ、知美も匂ってみてよ。」

知美は幸子の肛門に鼻を密着させて、クンクンと匂いを嗅ぎだす。
幸子は自分の肛門を他人に嗅がれるなど信じられない屈辱に、ワナワナと震えながら
大声で羞恥の悲鳴を上げていた。

「くっさ〜〜い。あんた毎日、洗っているの。こんなに臭いんじゃ、このお尻の穴の奥には、相当な物が詰まってそうね。」

「ケツの穴に指入れて、確かめてみようかしらね。」

百合が中指を立ててクネクネ動かしながら、不気味な笑みを浮かべている姿に、
幸子は目を大きくして恐る恐る小声で聞き返す。

「ゆ、、指って、どうゆうこと。」

「あら、その通りの意味よ。肛門に指を入れるのよ。」

「そ、そんな事、あなた正気なの。やめて――」

自分の肛門に意味もなく他人の指が入り込むなど、とても信じられなかったが、
百合は中指にローションを塗ると、幸子の括約筋を丹念にマッサージするのだった。

「キャァァ――――――――――――――――――、、、ウソ、そんな、、まさか、、あうう、、ちょっと、いや、やめて、、やめなさいよ――――」

「幸子主任、肛門に指を入れられた事ないの。」

「あ、、ある訳ないでしょう。あぅ、、ぅぅ、、やめて、、本当にもうやめてー」

「そうなの。じゃあ、初めての経験かしらね。アハハ、、」

肛門をマッサージされるなど生まれて初めての経験であるが、快感など全くなく
全身に悪寒を感じる。

肛門全体を、シワの一本一本を引き伸ばすような指の動きに、屈辱感が湯水のように
湧き出てくる。

「今の時代、肛門も性の対象として興味を持つ男も多いわよ。デザイン業じゃ、常に人気
がある新しい事を目指して取り込むのが常識でしょ。部下を苛めてばかりいないで、
あらゆる事に挑戦しなきゃ。その年で肛門に指を入れられた事ないなんてね、
恥かしいわよ。」

「ば、、バカな事を言わないで―――、、どうでもいいから、、とにかくやめて。」

「あら、まだ指を入れていないわよ。ケツの穴に指入れるために縛ったのに、
やめるわけないでしょう。」

「あ、、あなた、、こんな事を、平然と、、おかしいわ。狂っているわ。こんな人間と
働いていたなんて、、信じられないわ。」

「ねえ、百合。大分、肛門が解れてきたわ。もうそろそろ、指入れてもいいんじゃないの。」

「そんな、、、ウソでしょう。まさか、、本当に、、、、」

「ちょっと痛いけど、我慢よ。力を抜いてリラックスしなさい。」

「そ、、そんな、、待って、、なんの為に、、そんな事、、いや、、いやよ、、絶対に、、」

百合は肛門全体をマッサージしていた中指を中心の小さな穴に押し当てると、
徐々に指先に力を入れ、直腸内へとゆっくりと進めようとする。

「まってよ―――、、そんな、、そんな、、ウソよ、、百合さん、、待って、、やめて――」

百合の指先が肛門の入り口を無理矢理開けて僅かに入り込む。
一旦そこで動きを止めたかと思うと、ズボっと一気に中指の第一関節まで直腸内に
押し込まれる。

「キャァァァァ――――――――、、いや―――、、抜いて、、抜いて―――」

「アハハハ、、ついに入れてやったわ。いい気分。ムカついて恨んでいた女の尻の穴に

指を入れてやったわ。最高だわ。アハハハハハハ、、、」

苦痛に苦しむ幸子をさらに追い詰める為、肛門に差し込んだ指を上下にゆっくりと動かし、腸壁をさらに刺激する。

「いた、、いたい、、、待って、、もう、、お願い、、痛いってば―――、、百合さん、、
せめて、指だけは動かさないで、、、本当に痛いのよ―――、、、」

「幸子主任、私も心が痛かったわ。長い間、あなたに苛められてね。
今、あなたのお尻の穴の痛みに負けない位の苦痛だったわよ。」

百合はさらに指を奥に押し込み、根元までブッスリと挿入する。
上下にピストンしていた指を左右に動かし回転も加えて、幸子への苦痛をさらに
倍増させる。

「、、、オゴガ、、、がああああ、、ハッガガ、、、、」

慣れない刺激と苦痛に幸子の口から声にならない声が漏れる。

「もう、、許して――――、、お願い、、、抜いて、指を、、抜いて―――、、お願い、、」

「まだ、まだ。復讐は始まったばかりよ。ウフフフ。」

百合は不気味な笑みを浮かべて今までの事を思い浮かべていた。
最初は妄想と想像から始まったＳＭレイプ。それを実行するにはリスクが高い為、何度も
思い止まり中断を考えたが、今振り返れば決行して良かったと心の底から思うのであった。
綿密な計画を立て何度もシュミレーションした結果、全てが上手くいきトラブルもなく
スムーズに事が進展し、計画通り幸子のプライドを見事に打ち砕く事が出来た。
その為、第一目標としては、充分に成功したと言えるだろう。
今回の復讐計画の達成感を、肛門内に入り込んでいる中指に感じる直腸内独特な締め付け
と、無様な姿で涙を浮かべている幸子を見て改めて実感するのであった。

「知美、処女の肛門ってすごい締め付けだわ。面白いわね。ＳＭ常連客からじゃ考えられ
ない肛門よ。」

「そうなの。後で私にも指入れさせてね。ウフフ、私、見ているだけですごく興奮するわ。」

知美はビデオを撮影しながら興奮し、この地獄絵図に満足していた。
女同士の甚振りがこんなにも刺激があり、エロさを感じるものとは知美自身も驚いていた。

「ほら、ほら。もっと悶えなさい。ケツの穴で感じてみなさいよ。ほら、、」

―――パシ、、パシ、、―――

百合は幸子の肛門に入れた右手の中指を激しく動かしながら、左手で形のよい大きな双臀を平手打ちする。
自分の尻肉を叩かれる度に響くスパンキング音に凄まじい羞恥を感じる幸子であったが、
呻き声を出しながら耐える事しか出来なかった。

「肛門に指入れられて指を動かしながら、子供みたいにお尻を叩かれるなんて惨めね。
アハハ、、」

「あう、、いや、、ひ、、ひぃぃぃ―――、、」

直腸内で動く中指は、腸壁を無神経に刺激する事で、幸子に若干の便意を催していた。

（あうう、、いや、、ああ、、この感じ、、ウソ、、排便が、、うう、、ああ、、はうう、、いつまで続くの。
これ以上、やられると、、ううう、、、あああ、、なんで、、私が、、こんな惨めな目に・・・）

肛門に指を入れられてどの位時間が経ったのだろうか。数時間のような気もするし、数分のようにも思える。
幸子の時間の感覚を、激しい羞恥と苦痛が狂わしていた。

「ねえ、百合。幸子さんの肛門の調子はどう。大分、柔らかくなってきたんじゃないの。」

「そうね。もうそろそろ、充分ね。やり過ぎても締りが悪くなるから、もうそろそろかな。」

腸の奥深く入り込んだ指を、肛門の敏感な神経を無視して一気に引き抜いた。

「キャァァァ――――、、」

いきなり指を抜かれ驚いた幸子であったが、一旦指が体内から出た事を実感すると
取りあえずは安堵していた。

「あら、肛門の穴が少し開いているわ。ウフフ、、百合ったら少しやり過ぎじゃない。」

「そう、手加減したつもりだけどね。ねえ知美、それよりもこれ見てよ。」

長い時間、幸子の直腸内の奥深くを必要以上に刺激した中指には、所々に排泄物が
付着していた。

「やだ――、、ウンチが指についているわ。きったないわね。アハハハ、、」

「笑い事じゃないわよ。私の身にもなってよ。ウンコがこびりついているわ。」

「ねえ、幸子さん、毎日ちゃんとウンコしてるの。こんな汚いウンコを付けて、あなた
ひょっとして便秘なの。」

幸子の自尊心を踏み躙るような容赦のない言葉が飛び交う。
ただでさえ、肛門に指を入れられて散々羞恥地獄を味合わされ、今だにその屈辱から立ち
直れない中、とどめ刺す侮辱に悔しさ・惨めさで気がおかしくなりそうであった。

（、、うう、、肛門に指を入れたら誰だって、、、当たり前じゃない。それを大きな声で、、
まるで楽しむように、、うう、、笑いながら、、ウン、、コ、、なんて、、酷い、、ううう、、）

「幸子さん、あなたのウンコ、すごく臭いわよ。鼻が曲がりそうだわ。あなたも臭って
みなさいよ。」

「ちょ、、ちょっと、い、いや――――、、、ち、、近づけないで―――、、そんな、汚いわ。」

「汚いって、あなたの体の中の物よ。ほら、匂いなさい。」

「で、、出来る訳、、ないでしょう―――、、い、、いい加減にして、、」

「私に逆らうのね。あ、そう。知美、幸子主任のお尻の穴に指入れてあげて。
手加減しなくていいわよ。」

「はぁぁぁ―――、、ちょっと、そんな、、まって、、そんな、、」

「ウフフ、待ってました。グリグリ、ズボズボいくわよ。」

遠慮のない一撃が幸子の肛門に容赦なく襲い掛かる。知美の長い中指が幸子の肛門に根元まで一気に入り込むと、上下左右に動き直腸から脳天に掛けて強い刺激を送る。

「キャァァァァ――――、、いや――――、、もういい、、もうやめて―――」

「言う事を聞かないからよ。素直になったほうがいいわよ。抵抗したらこうやって
罰を受ける事になるわよ。」

「わかったわよ―――、、、わかったから抜いて、、抜いて――――」

「そう、じゃあ、臭ってくれるわね。はい、どうぞ。」

（、、、うう、、こんな卑劣な方法で復讐されるなんて、、、うう、、く、、くさい、、、臭いわ。
自分のだけど、、、く、、くさい。ううううう、、、）

「どう、幸子主任。臭いでしょう。あなたの体の中には、こんなに汚い物があるのよ。
偉そうに人を怒鳴っているけど、まずは自分の便秘を治して綺麗なウンコを出せるように
なってから言いなさいよ。ウフフ、、アハハハハ、、、」

「ひ、酷いわ、、あなたは、、、、うううう、、、こんな姑息な方法でしか仕返しが出来ない
あなたに、そんな事を言われたくないわよ。」

「あら、息を吹き返したみたいに元気になったわね。いいわ、いいわよ。その調子よ。」

「そ、、そうやって、、また辱めて、、楽しむつもりね。だったら気が済むまで、、好きに
すればいいわ。この変態女―――、ゲズ女―――。」

「私達が変態ゲス女ですって。ウフフ、、いい事言うわね。よ――く覚えておくからね。」

「それじゃあ早速、お言葉に甘えて好きにさせてもらおうかな。」

知美は予め用意していたワゴンを持ち出すと、トレーに乗せたさ様々な道具を見せ付ける為、幸子目の前に持っていく。
そこには、玉の連なったネックレスのような物、細く長い棒のような物など、幸子は初めて見るものばかりであった。

「これね、アナルバイブっていうのよ。バイブレーターって知っているでしょう。
男の性器を象った物、張型よ。その肛門バージョンよ。」

「・・・・・な・・・・な、、、」

「これ全部使うわよ。ウフフ、、楽しみね。」

「、、そ、、そんな、、」

数々の種類のアナルバイブを全て自分の肛門に入れるというのだ。その事を頭の中で想像すると、あまりの恐ろしさに身の毛がよだつ。
大きさや奇妙な形からして、ついさっき指を入れられた以上の苦痛と屈辱である事は間違いない。

（な、、なんで、、この女達、、お尻の穴をこんなにも、、一体なにが、、面白いのよ。ううう、、こんなの屈辱だわ、、まだ最初の性器への仕打ちの方が、、全然マシだわ。
百合が、、この女が、こんな変態だったなんて、、）

幸子はエスカレートしていく羞恥地獄に恐ろしくなり、ついさっき口にした「なんでもする」という決意を後悔していた。

「さあ、さっそくバイブを突っ込みたいとこだけど、、幸子さんの肛門はウンコが一杯詰まっているから、アナルバイブが汚れそうね。」

「そうよ、百合。そのバイブ新品だから、臭いウンコで汚されるのは勘弁よ。」

「お、、お尻に入れれば、誰だって当然じゃないの。」

「あら、私達は健康だからそんな事ないわ。幸子主任は仕事の頑張り過ぎで、生活も乱れて便秘になったんでしょう。」

「し、、してないわよ。そんな、、そんなこと、、」

「誤魔化さないの。何日前にウンコしたの。正直に答えてよ。」

「そ、、そんな事、、か、、関係ないでしょう。」

（うう、、この女達、、今度は、ウンコだなんて。肛門の次はウンコなんて・・・
馬鹿げてる。まるで子供じゃないの。低俗だわ。）

「関係あるわよ。幸子主任の不健康を知らん振り出来ないわ。体を壊したら良い仕事が
出来ないでしょう。」

（、、、こ、、この女、、私を、、こんなにも甚振っといて、、、よく、そんな事を、、、）

「だからね、私が治療してあげる。幸子主任も健康になるしバイブや指を突っ込んでも
汚れなくなるわ。」

（な、、何を、言ってるのよ。この女、、意味が分からないわ・・・）

「ウッフフフフ、、楽しみね。幸子主任、今からあなたに、浣腸してあげるわ。」

「・・・なに、、なんなの。」

「浣腸よ。　か、ん、ちょ、う。知らないの。便秘の人が使う薬よ。お尻の穴から
薬を入れてウンコを無理矢理出させるのよ。」

百合が意図する内容を理解した瞬間、幸子はあまりのおぞましさに悪寒が走る。
「浣腸」それは医療行為による治療目的のために行われるが、健康体の幸子には必要の
ないものである。
本来の使用方法ではなく一部の変態以外、世間ではタブーとされているプレイを、本人の
同意を得ずに屈辱を与える事が目的で浣腸するなど、あまりの非人道的で卑劣な行為に、
怒りがメラメラと湧き上がる。

（、、、か、、かんちょう、、カンチョウ、、あの浣腸のこと。し、信じられない。気が狂って
いるわ。そんな、浣腸してその後はどうなるのよ。）

「ねえ、幸子さん。浣腸された事ある。」

「ある訳ないでしょう―――、、そんな変態がやるようなこと、狂っているわ――。」
冗談はいいから、もう終わりにして。」

「幸子主任、冗談じゃないわよ。あなたを辱めて泣き叫ばすには、浣腸は打ってつけよ。
想像してみなさいよ。立派な大人がお尻の穴を出して、そこに意味もなく面白半分で
浣腸されるのよ。アハハハ、、いい気味ね～～～」

「じょ、、冗談じゃないわ――。ふざけないで、、誰がそんな事を、、」

「どんなに嫌がっても無駄よ。押さえ付けて無理矢理、ケツの穴から浣腸してやるわ。
今日は貴重な体験が出来るわね。ウフフ、、、これから毎日、トイレでウンコする度に
思い出して泣き崩れるわよ。」

百合の迫力はる言葉に、決して冗談ではない事を実感する幸子。
もしも本当に浣腸されたら、、っと最悪の事態を想定し、頭の中でその様を想像してみると、
あまりのおぞましさと恥ずかしさに泣き崩れそうであった。

（浣腸されるの。私が、、なんのために、、しかも、、こんな女達に、、、
まって、その後、、その後はどうなるの。子供の頃に浣腸された事はあるけど、あの異常な
便意を、、、ウソ、、そんな、、い、、いや――――、、）

この二人は排便する姿までも笑いものにし辱めるのでは、、もしそんな事になれば
とても正気ではいられない。
幸子は浣腸から様々な羞恥地獄を連想していくと、顔から火が出る程の恥ずかしさで
発狂してしまいそうであった。

「あら、いい顔つきになったわね。分かったでしょう。幸子主任は今から部下の私に
浣腸されるの。ここの穴にね。」

百合が幸子の肛門を指先でツンツンと突く。
幸子は自分の肛門を触られて、今から間違いなく浣腸される事を認識した瞬間、
大声で悲鳴を上げるのであった。

「さ、、触らないで――――――」

「あら、いいじゃない。今さら恥ずかしがらなくても。私は主任のオマンコと肛門まで見たのよ。さらにお尻の穴に指まで入れられて、これから浣腸もするのよ。
そこまでされたら恥なんてないでしょう。ウフフ、、幸子主任に、ついに浣腸出来る日が来るなんてね。
でも、それで終わりじゃないわよ。浣腸されたその後は、、ウフフ、、どんなウンコ出すのか楽しみね。」

「や、やめて、、やめて、、やめて――――、、」